

■開催概要

- シリーズ名称 : 2025鈴鹿サンデーロードレース第3戦
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/242台

CBR250R Dream Cup	37台
CBR250RR Dream Cup	30台
インターJP250	10台
ナショナルJP250	25台
インターJ-GP3	7台 (内、HRC NSF250R Challenge 3台)
ナショナルJ-GP3	13台 (内、HRC NSF250R Challenge 9台)
インターJSB1000	14台
ナショナルST600	41台
インターST1000	22台
インターST600	16台
ナショナルST1000	27台
- 開催日 : 2025年9月20日(土)・21日(日)
- 天候/路面 : (20日)曇り時々雨/ウェット→ハーフウェット→ドライ、(21日)晴れ/ハーフウェット→ドライ

★次回レース予定

第61回 NGKスパークプラグ杯 2025鈴鹿サンデーロードレース最終戦

- 開催日 : 2025年11月8日(土)・9日(日)
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 開催クラス : インターJSB1000、インター/ナショナルST1000・J-GP3・ST600・JP250
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>



9月20日(土)に公式予選と決勝レースが行われたCBR250RR Dream Cup。チームメイトでディフェンディングチャンプ福井宏至が、新チャンピオンに輝いた大倉拓夢(写真右)を祝福する

Series Sponsors



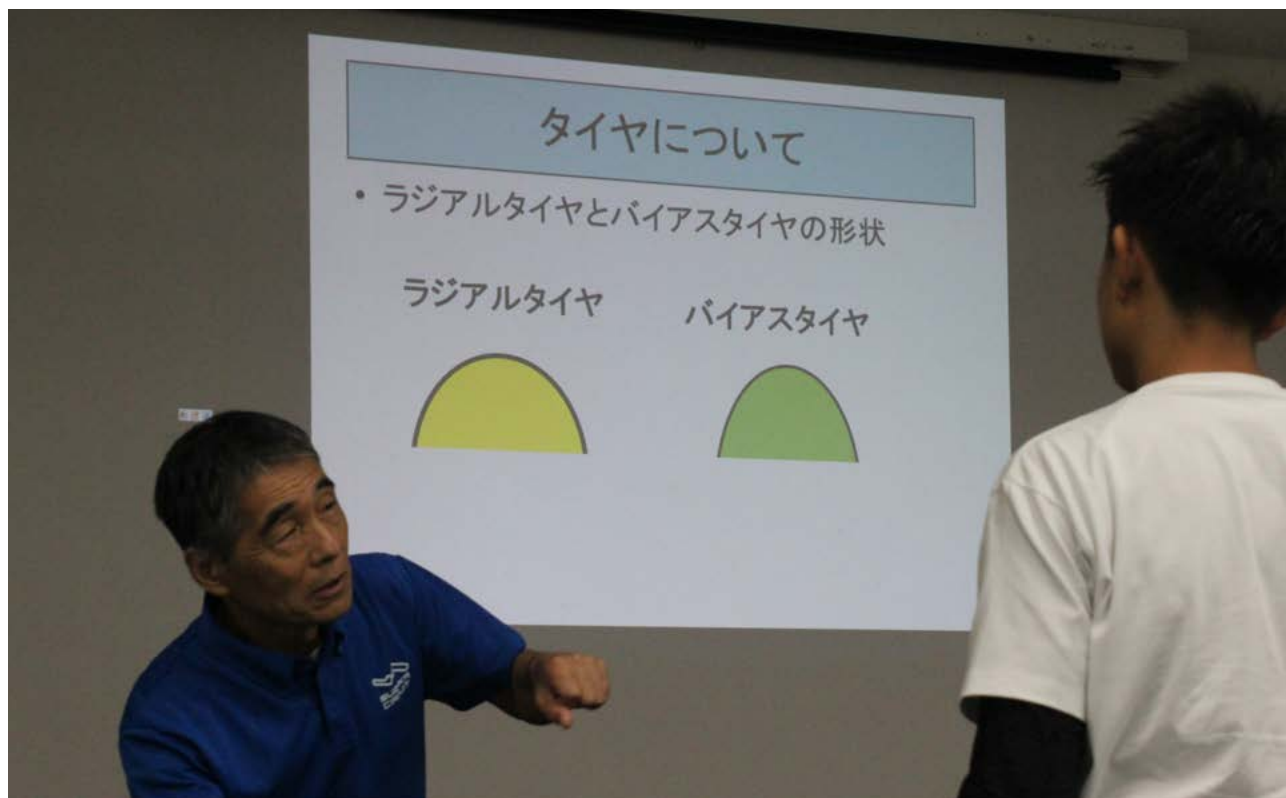
チャンピオンが決まったカテゴリーもあり、 クライマックスに向けていつも以上に盛り上がった第3戦

前戦、鈴鹿サンデーロードレース第2戦が開催されたのは6月7日(土)・8日(日)のことだった。“コカ・コーラ”鈴鹿8耐第46回大会を間に挟み、9月20日(土)・21日(日)に鈴鹿サンデー第3戦が行われた。この鈴鹿サンデーは全日本ロードレース選手権へとつながる競技志向の強い2輪レースシリーズだ。ステップアップを目指す若手からレースを楽しむベテランまでもが一堂に会し、しのぎを削ることで知られている。今回も小排気量マシンによって争われるインター／ナショナルJ-GP3や同JP250のレースを中心に、若手同士、あるいはベテランを絡めての激しいバトルが展開された。

初日の20日(土)には開催全クラスのCBR250R/CBR250RR Dream Cupの公式予選と決勝レースが行われた。CBR250R/CBR250RRの2カテゴリーは今回が2025年シーズンの最終戦ということで、シリーズチャンピオンを掛けていつも以上に激しいバトルが展開された。特にCBR250RRはファイナルラップの最終コーナー立ち上がりまで順位が目まぐるしく変わる展開となった。その他全クラスの決勝レースは翌21日(日)に開催され、中でもストッククラス、特にインターST1000とインターST600のレースでは中盤以降降下と時目も離せない接戦が続いた。

さらには、今回はダブルエントリーするライダーの姿も目立った。インターJSB1000とインターST1000、インターST600とCBR250R Dream Cup、インターJP250とCBR250RR Dream Cup、ナショナルJP250とCBR250R Dream Cupにダブルエントリーするライダーがあり、それぞれ力走が披露されて見どころとなった。

次戦は「NGKスパークプラグ杯」という大会名称でよく知られる伝統の一戦。日本特殊陶業株式会社のご協賛のもとで開催されるこのレースでは全カテゴリーのシリーズチャンピオンが決まる。この最終戦にも是非ご注目いただきたい。



レースウィーク中は3回に渡ってテクニカルアドバイザー講習会が開催された。MFJテクニカルアドバイザーの小澤源男氏から有効なタイヤの使い方などがレクチャーされた

Series Sponsors

レースレポート(1)

■CBR250R Dream Cup

公式予選では鈴木未来翔が序盤の内に後続を大きく引き離す2分52秒845をマーク。鈴木は最後の最後で自己ベストを更新する2分52秒484をマークし、ポールポジションを獲得した。決勝レースではその鈴木がホールショットをゲット。鈴木はオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。その後方では保江瑛翔、栗原文太郎、中沢寿寛、堀絢仁の4台が2番手グループを形成。スタートで出遅れたランキングリーダーの秀崎隆が徐々にそこに接続する。堀と中沢が2番手争いを展開。秀崎がそれに続くが、その秀崎が3周目のデグナーカーブでコースアウトし、12番手まで順位を落とす。鈴木はその後安定したペースで周回を重ね、2位の保江以降に13秒573ものアドバンテージを築いて独走優勝を飾った。5位でチェッカーを受けた中沢が10年ぶりにチャンピオンに輝いた。



CBR250R Dream Cup表彰式(優勝:鈴木未来翔、2位:保江瑛翔、3位:堀絢仁)



Series Sponsors

レースレポート(2)

■CBR250RR Dream Cup

公式予選ではランキング2位の福井宏至がまずタイミングボードの頂点に。辻本範行がそれに続く。筒井伸が辻本と福井のタイムを上回るが、辻本が最後に2分42秒880をマークしてポールポジションを獲得した。決勝レースでは3番グリッドスタートの福井が良いクラッチミートを披露。ホールショットを奪った福井の背後に辻本が迫る。辻本が西ストレートで福井の前に出るが、福井、辻本、2番グリッドスタートの筒井のオーダーでオープニングラップを終了。4番手は橋本竜弥。その背後にランキンリーダーの大倉拓夢が続く。大倉は橋本、辻本を立て続けにパス。大倉は3周目に一時的にトップに浮上するが、再び集団に飲み込まれる。トップグループのバトルは終盤まで続いたが、ファイナルラップのシケインでトップに立った大倉が優勝。大倉が全勝でチャンピオンを決めた。



CBR250RR Dream Cup表彰式 (優勝:大倉拓夢、2位:KIM JEONGGIL、3位:筒井伸)



Series Sponsors

レースレポート(3)

■インター／ナショナルJP250

公式予選では開幕戦のインタークラスウィナー渡辺瑛貴が後続を1秒790引き離す2分44秒539という好タイムをマークし、ポールポジションを獲得した。ウェット宣言が出されたため、6周で争われることとなった決勝レースではドライタイヤとレインタイヤを選んだライダーが入り混じってスタート。3番グリッドスタートの鈴木未来翔がホールショットを奪うと、渡辺がそれに続く。鈴木、渡辺、12番グリッドスタートの竹本倫太郎のオーダーでオープニングラップを終了。その3台に中川空嶺、南博之、澤合柊、鈴木悠太、小野雅治を加えた8台がトップ集団を形成する。4周目の130Rで鈴木(未)が転倒。渡辺が頭ひとつ抜け出したが、再び渡辺に接近してこれをパスした竹本がトップチェッカーを受けると同時にインターJP250で2連勝。総合3位の中川がナショナルJP250を制した。



インターJP250表彰式 (優勝: 竹本倫太郎、2位: 渡辺瑛貴、3位: 鈴木悠太)



ナショナルJP250表彰式 (優勝: 中川空嶺、2位: 南博之、3位: 澤合柊)

Series Sponsors

■インター／ナショナルJP250



ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式 (Honda賞: 南博之、YAMAHA賞: 中川空嶺、KTM賞: 中尾正太<以上写真左から>、KAWASAKI賞: 神吉龍成)

Series Sponsors



レースレポート(4)

■インター／ナショナルJ-GP3・HRC NSF250R Challenge

岩野偉大が公式予選の中盤で2分36秒665をマーク。雨が止み、コースコンディションが回復してきたため、それに迫るライダーが続出したが、結局岩野のタイムがベストとなった。決勝レースでは岩野が良いクラッチミートを披露するが、6番グリッドスタートの富樫虎太郎と5番グリッドスタートの長谷川蒼馬がその岩野をパス。富樫、長谷川、7番グリッドスタートの中嶋昂士、岩野のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。2周目になると富樫は独走状態に。3番手を走行していた中嶋のマシンにトラブルが発生する。10番グリッドからスタートした戸高綸太郎が岩野をパスし、長谷川に続く3番手まで浮上。後続に23秒875ものアドバンテージを築いてトップチェッカーを受けた富樫がナショナルJ-GP3で3連勝を飾った。インタークラスのウィナーは総合2位の戸高だった。



インターJ-GP3表彰式(優勝:戸高綸太郎、2位:金子寛、3位:Pancharuch Chitwirulchat)



ナショナルJ-GP3表彰式(優勝:富樫虎太郎、2位:長谷川蒼馬、3位:石川颯人)

Series Sponsors

レースレポート(5)

■インターJSB1000

メインストレートで水しぶきが上がる状態でスタートした公式予選では、宮腰武がタイミングボードの頂点に。宮腰がマークした2分23秒853がトップタイムとなった。決勝レースでは3番グリッドスタートの加藤高史がホールショットをゲット。何度かフロントを上げながら2番グリッドスタートの長谷川修大が加藤に続く。逆バンクで長谷川が加藤をパスしてトップに浮上。長谷川、加藤、遠藤晃慶、宮腰、高居京平、荒川雅彦のオーダーでオープニングラップを終了する。長谷川、加藤、遠藤は次第にそれぞれ単独走行に。遠藤の若干後方で宮腰、高居、荒川、花村峻一、福山京太がテールtoノーズの状態が続く。長谷川は自身がマークしたファステストラップを更新しながらトップを独走するが、中盤には加藤が長谷川に接近。しかしパスするには至らず、長谷川が今季初優勝を飾った。



インターJSB1000表彰式 (優勝:長谷川修大、2位:加藤高史、3位:高居京平)



Series Sponsors

レースレポート(6)

■ナショナルST600

公式予選では田中壮途がドライタイヤでコースイン。田中はコンディションが回復した予選の後半で2分27秒138をマークすると、さらに2分26秒407を記録して自己ベストを更新。田中が今季初ポールポジションを獲得した。決勝レースではその田中がホールショットを奪うと、その背後に7番グリッドスタートのターナー健人、3番グリッドスタートの芝本友暉と続く。しかし、芝本が130Rで転倒。トップ集団の1台、竹本周平がピットに戻ってくる。ターナー、田中のオーダーでオープニングラップを帰ってくると、すぐにターナーが独走状態に。田中も単独2番手になる。白岩直樹が柏原信太郎をパスして3番手に。単独4番点になった柏原の後方では下谷邦夫が5番手に浮上する。一人旅を続けたターナーはバックマーカーを処理しながら危ない走りを披露し、独走優勝を決めた。



ナショナルST600表彰式(優勝:ターナー健人、2位:田中壮途、3位:白岩直樹)



Series Sponsors

レースレポート(7)

■インターST600

公式予選では平城雄飛が2分17秒804をマーク。中村敬司、塚原進介、坂本佑心、岩田凌吾らがそれに続いたが、2分16秒966をマークして自己ベストを更新した平城がポールポジションを獲得した。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの中村。それに5番グリッドスタートの岩田が続く。平城が転倒。中村、岩田、6番グリッドスタートの笠井杏樹のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。笠井が2周目の130Rで中村に続く2番手に。笠井の後方には3番グリッドスタートの塚原が続く。3周目に笠井がミス。塚原が2番手に浮上するが、再び笠井が前に。笠井は5周目の西ストレートで中村に並ぶと、これをパス。その後、その2台のバトルに川本宜論が加わる。しかし、その川本がミス。トップでファイナルラップに突入した笠井が優勝し、チャンピオンを決めた。



インターST600表彰式(優勝:笠井杏樹、2位:中村敬司、3位:川本宜論)



Series Sponsors

レースレポート(8)

■インターST1000

ウェットパッチが残る路面で行われた公式予選の序盤ではタイミングボードの上位の順位が目まぐるしく入れ替わった。その中、スリックタイヤに交換した荒川雅彦が2分22秒368をマークしてポールポジションを獲得した。決勝レースでは5番グリッドスタートの中堀拓己がホールショットを奪い、そのまま後続を引き離しにかかる。2番グリッドスタートの片平亮輔も単独2番手に。しかし、2周目のメインストレートで転倒したマシンがあったことにより、赤旗が出されてレースは中断。仕切り直して行われた第2レースでは片平が良いスタートを決める。片平、村瀬豊、中堀のオーダーでオープニングラップを終了すると片平が単独トップに。中堀と吉廣光が村瀬をパスする。4周目には中堀と吉廣が片平に接近。吉廣と片平が転倒して順位を落としたことにより、中堀の優勝が決まった。



インターST1000表彰式(優勝:中堀拓己、2位:安達勝紀、3位:村瀬豊)



Series Sponsors

レースレポート(9)

■ナショナルST1000

公式予選ではまず竹中淳雄がタイミングボードの頂点に。それに片岡亮太、古田浩と続いたが、2分19秒121をマークしてピットに入った竹中がポールポジションを獲得した。この日最後となったこのカテゴリーの決勝レースでは竹中がホールショットを奪ったが、その竹中を3番グリッドスタートの古田がバス。古田と竹中がオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。古田、竹中、2番グリッドスタートの片岡のオーダーでオープニングラップを終了。バトルを続けたその3台だが、3周目のシケインで片岡が単独の転倒。古田は次第に竹中を引き離して単独トップに。竹中も単独2番手となる。田辺利治と小森直樹が3番手争い、杉本慎平と立秋幸治が5番手争いを展開する。トップを走っていた古田が7周目に転倒。これによりトップに立った竹中が今季初優勝を飾った。



ナショナルST1000表彰式(優勝:竹中淳雄、2位:田辺利治、3位:小森直樹)



Series Sponsors

**Voice
of
Pick up
Riders**
-SUNDAY EDITION-

この日、キラリと光った
ライダーに問一答

ナショナルST600で優勝した

ターナー健人 選手

(Takeishi Technical Racing / Honda / CBR600RR)



Q.田中壮途選手と同点ランキングトップで今回の第3戦を迎えました。公式予選はどのように戦いましたか。

A. タイヤ選択をミスし、レインタイヤでコースに出てしまいました。路面がすぐに乾いてきてタイヤが解けてタイムが出ず、苦労しました。消化不良の予選でした。

Q.決勝レースでは早々に独走状態になりました。

A. スタートに成功し、思っていたより早く前に出ることができました。トップに立ってからはそのまま行こうと思っていました。最後の3周ぐらいいは集中力が途切れましたが、トップのままチェッカーを受けることができて良かったです。

Q.今回のレースで田中選手に5ポイントリードを築き、最終戦のNGKスパークプラグ杯を迎えます。

A. 最終戦でも優勝したいですね。勝ってチャンピオンを決めたいです。是非応援してください。

Series Sponsors